

日本 EIMY 研究所報
EIMYJ-1103
平成 23 年 3 月

震災に学ぶ

～エネルギー・環境学に携わってきた者として～



新妻 弘明
東北大学

この度の震災は歴史の節目、現代文明の分岐点

エネルギー政策の抜本的見直し

災害多発型社会（地殻変動，温暖化，感染症）

エネルギー多消費型文明

経済成長を前提とした文明

効率優先社会

巨大システム相互依存社会

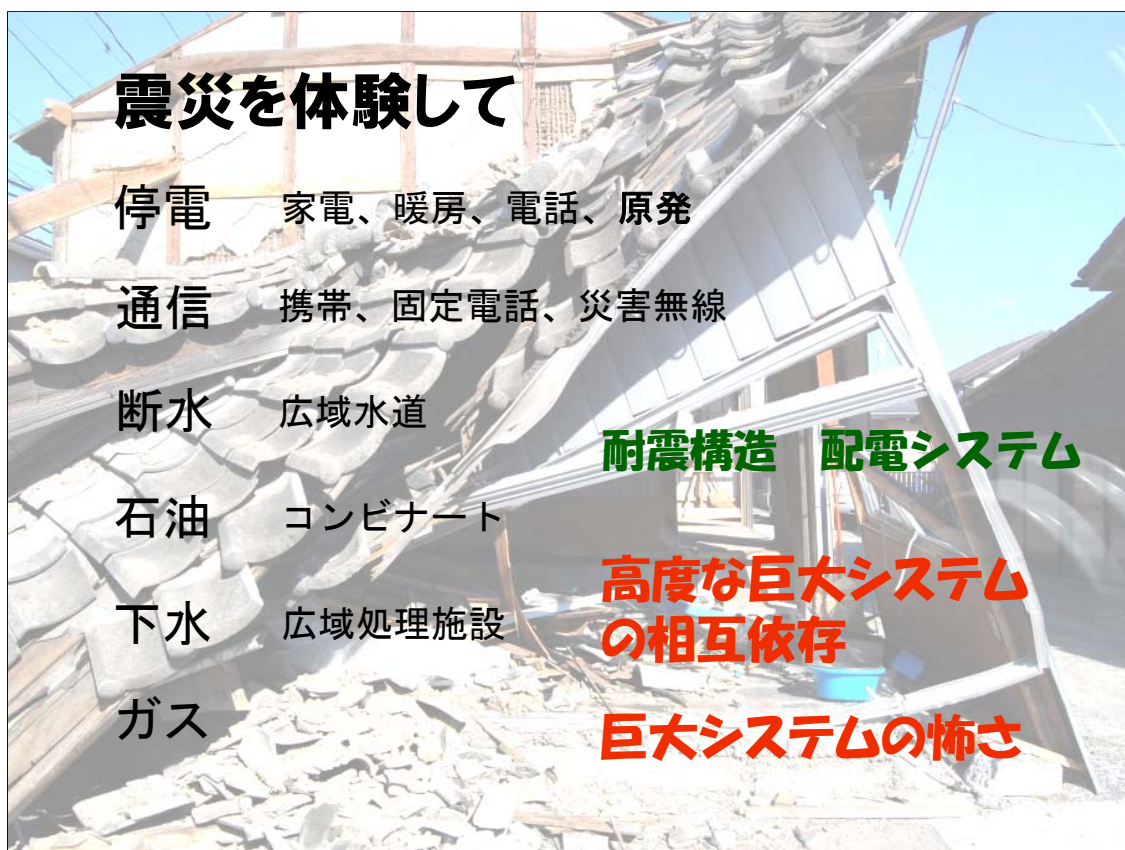
社会の体質

組織の論理

この度の震災は1000年に一度のものであり、その復興には数10年単位の時間とあらゆる叡知を必要としています。これは歴史の一つの節目であるとともに、現代文明の分岐点であると思います。なぜなら、福島第一原子力発電所の事故により、我が国さらには世界のエネルギー政策の抜本的見直しは必至であるからです。また、今回の巨大地震により我が国の地殻応力状態は大きく変化し、それにともないこれまでとは異なったメカニズムの地震の多発や地殻変動が予測されます。さらに、地球温暖化による超大型台風や豪雨の多発と今回の地震による地盤沈下や地割れがあいまって、各地で自然災害が多発するとともに、感染症の危険度も増すものと思われます。従って、これまでの社会体制、防災体制、そして我々のライフスタイルも抜本的に見直す必要があります。

しかし、今回の震災は、単なる被災地の復興や、我が国の社会体制・防災体制の変革、我が国社会の再興を促すものではなく、原発を必要とするエネルギー多消費型文明、経済成長を前提とした文明、効率優先社会、そして巨大な人工システムに相互依存した文明に対して大きな警鐘を鳴らしたものと考えられるべきであると思います。震災を機に、持続可能な環境共生型の文明社会に転換するのか、あるいはこれまでの文明の延長をばく進するかの重大な岐路にあると思います。

また、今回の震災と原発事故は、我が国社会の体質や組織の論理の弊害を露呈させたと言えます。被災地にあっても、平常時には見えない現代社会の欠陥と良さを各所で垣間見ることができました。

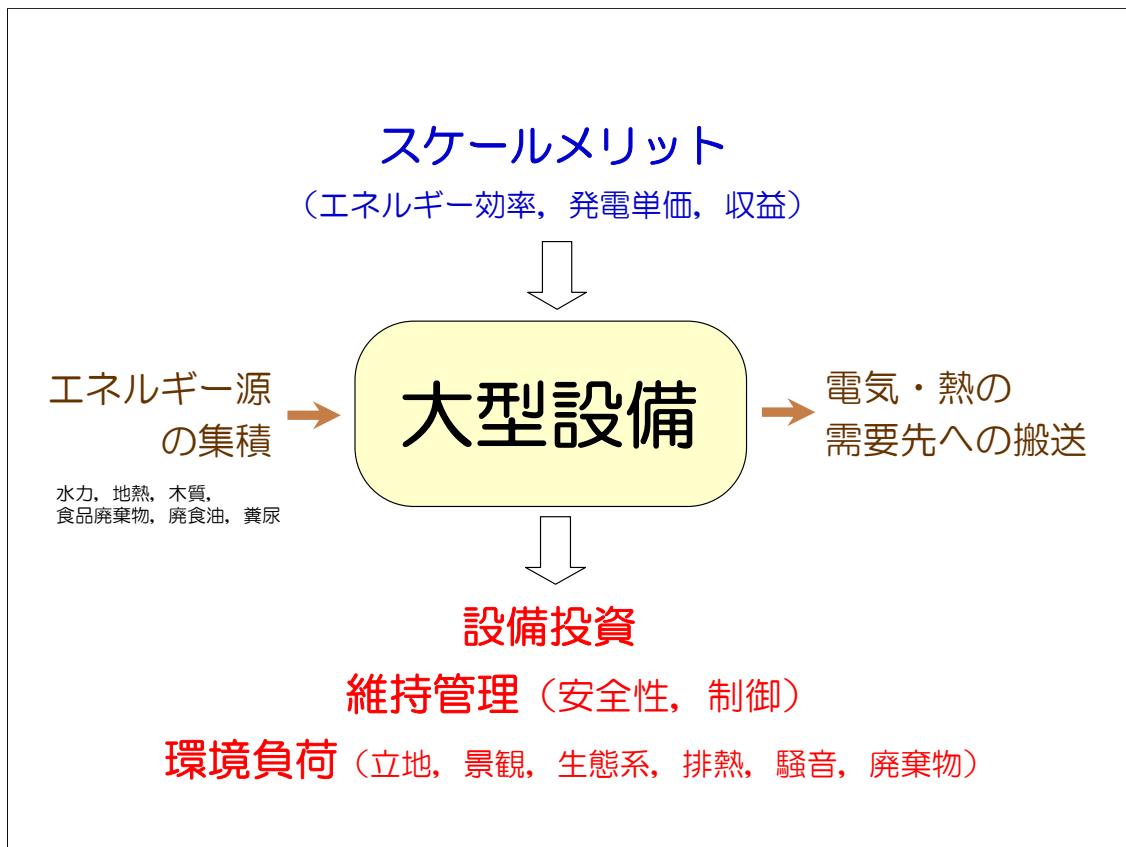


大津波により壊滅的被害を受けた沿岸部とは比較になりませんが、今回の震災では仙台にあっても、長期にわたって停電、通信回線の途絶、断水、ガソリン・灯油の供給停止、下水処理機能の喪失、ガス供給停止が続きました。それでもあれだけの大地震にあって、倒壊建物の割合は多くはなく、また停電も早期に復旧しました。これは現代の耐震技術や配電技術によるところが大きいことを示しています。

停電により、電気を必要とするあらゆる家電、石油ストーブ、電話までが使用不能となりました。またこのような時こそ力を発揮すると思われていた携帯電話も基地局の電源喪失や電話の電池切れによって情報途絶地域が続出し、その脆弱性を露呈しました。そしてこの電源喪失は原発の重大事故へとつながりました。

宮城県では断水が3週間にも及びました。これは宮城県を南北につなぐ広域水道の基幹ラインの破損によるものでした。また、広域の下水を大規模な処理システムに集約したことが問題を深刻にしました。

このように、今回の震災は高度な巨大システムに相互依存した現代文明社会の脆弱さを露呈するとともに、巨大システムの怖さを我々に知らしめました。

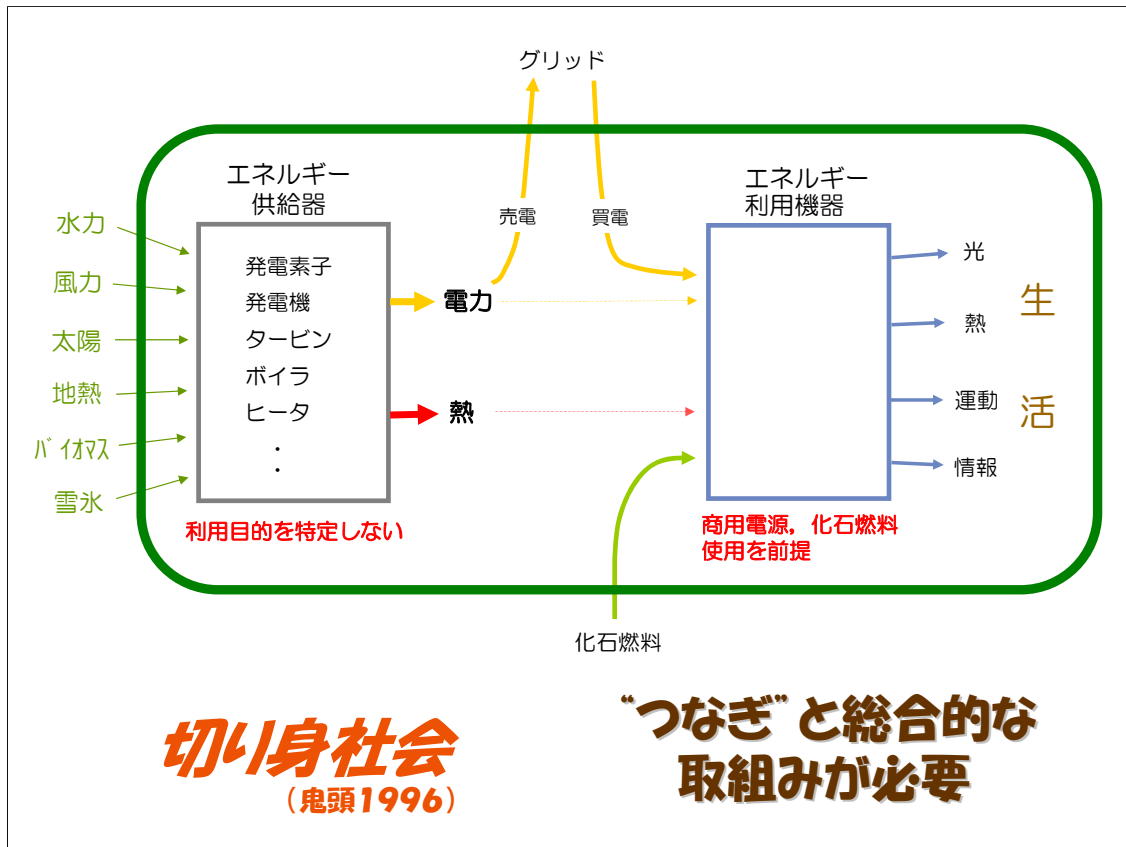


一般に、エネルギー機器では規模が大きくなるほど出力エネルギーあたりのコストが低下し、これはスケールメリットと呼ばれています。火力発電所や原子力発電所がどんどん大型化したのはこのためです。しかし、規模が大きくなればなるほど安全性が問題となり、その制御や維持管理に高度な技術が必要となります。また地域への環境負荷も大きくなるとともに、それが失われた場合の社会的影響が大きくなります。今回の巨大システムの一連のトラブルはそれを露呈したと言えます。



このような状況にあって自分で何ができたかを振り返ってみますと、食べ物は自宅にあって調理に水をあまり使わないものを食べるか、非常に数が限られていた、開いている食品店に並ぶかでした。しかし、ガソリン供給停止により、食品店では仕入れができず、買う方も買い物にでるのがままならない状態でした。飲み水は給水にたよりましたが、生活用水は我が家の裏の小さな沢の水を利用することができました。暖房については、電気と灯油の供給停止で寒さに打ち震えた人が多かったのですが、我が家では薪ストーブが大活躍しました。薪は来年の分まであり、暖房のほか料理や湯沸かしにも使うことができました。また停電の暗がり中の薪ストーブの炎に心を癒されました。

このように、大地震の後はお金が全く役に立たない世界でした。沢の水を汲んで運んでいるとき、ふと、「昔はこのようなことはごく当たり前であった。大変だけど、これはこれで自らのいろいろな工夫が活き、やりがいも出てくる。これが蛇口をひねるだけで水が出てくるとは何と便利な世界なのだろう。でもこれは食べることも噛むことも不要な点滴を受けているようなものではないだろうか。この点滴が止まれば、生きていけないような社会に我々は住んでいるのではないだろうか」と思いました。



鬼頭秀一氏は、現代社会は、自然と人間との関わりがスーパーマーケットで売っている肉の切り身のように、とぎれとぎれになっており、それが今日の環境問題の本源になっていると指摘しています。資源やエネルギーについても、その源と消費者の間はとぎれとぎれになっており、そこでは、それらを構成する要素ごとに経済的に採算のあうものだけが実現し、それらは局所的に最適化が行われているにすぎません。そしてそれらの要素の間は貨幣を通してのみつながっています。そのようなシステムが、今度の震災では一挙に崩壊したわけです。しかし、食べ物、エネルギー、資源を少しでも自給できる状況にあった人は、それだけの安全・安心を得ることができました。

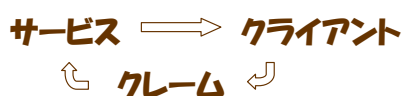
専門家依存社会

専門家でないとうからないシステム

過度の専門分化 **誰も全体がわからない**

正常に動くシステムをマニュアル通りにしか動かさない **正常に動かないと手も足もでない**

人々を無能化するシステム



お金でしかつながっていない

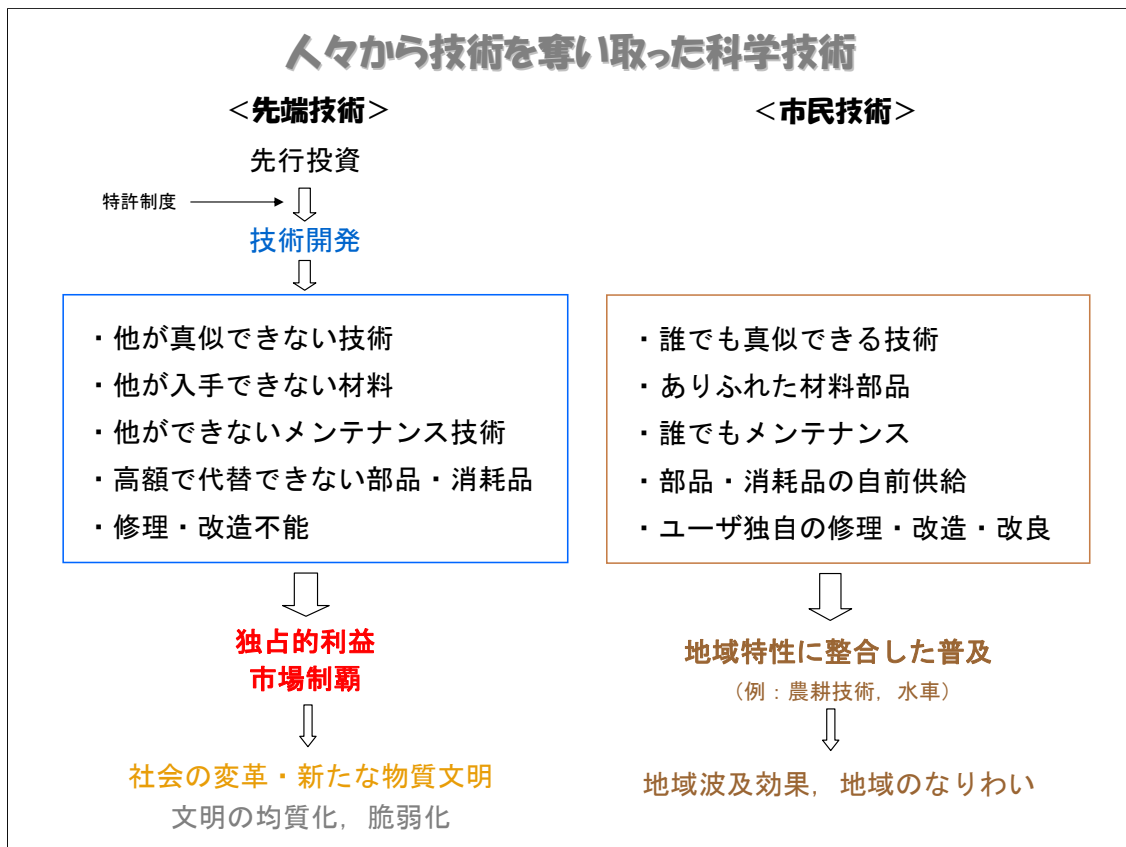
インフラ、教育、福祉、医療まで

人々から技術を奪い取った科学技術

今回の震災は専門家依存社会の脆弱さと怖さを露呈させています。現代文明の根幹を支えるシステムの多くが、専門家と言われる人でないとわからないシステムになっており、その専門家の間でも過度の専門分化が進み、例えば自動車一つとっても、複数の専門家がそろわないと誰も全体を掌握できないようになってしまっています。

さらに、このように専門家によってつくられた高度なシステムは、人々はシステムが正常に作動することを前提にして、使用マニュアルに沿った使い方しかできないようになっていきます。したがって、今回の原発の事故のように、システムが想定した範囲で動かないと手も足も出なくなるわけです。

このようなシステムは人々を無能化するシステムでもあります。インフラに限らず、教育や福祉、医療の分野まで専門分化が進み、また、サービスを提供する人と受ける人の乖離が甚だしくなっています。そこでは、受ける人は自らの叡知を用いることなく、お金によりそのサービスを享受し、もしそれに不足や欠陥があれば、自らが責任を負うことなくクレームとしてサービス提供者の責任を追求します。このような社会システムは結果として、自らは何もできない人々を生み出しています。私はこのような状況を「人々から技術を奪い取った科学技術」と言っています。



現代文明社会で重視されている先端技術というのはどういうものでしょうか。そこでは、他が入手できないような材料を用い、他が真似できないような技術を駆使して、他に無いような性能を持つ製品を開発するのが望ましいのです。さらに、他ができないメンテナンス技術を必要とし、代替できない部品や消耗品を用い、他社による修理や改造を不能にすれば、その製品により市場を制覇し、独占的利益をあげることができます。このような駆動力により、技術は限りなく発展し、ITに象徴されるような社会の変革や、新たな物質文明を産みだしています。しかし、グローバルなこのような技術開発は、一方で、文明の均質化と脆弱化をもたらしています。

かつては、あらゆる地域に技術者や職人さんと言われる人がいて、ありふれた材料部品を用い、一定の能力があれば誰でも真似できるようないろいろなものをつくっていました。それらは、誰でもメンテナンスでき、部品や消耗品の自前供給も、ユーザ独自の修理や改造、改良も可能でした。これによって、農耕技術がそうであったように、技術の広汎な普及や地域特性に適合した技術改良が可能でした。また、今回の震災のような不測の事態が生じれば益々その真価を発揮しました。しかし現代社会ではこのようなシステムも、地域の技術者や職人さんの多くも姿を消してしまいました。

事実より理屈

「科学的根拠がなければ事実ではない」

「科学的に証明されなければ史実ではない」

理屈の過信

伝承の軽視、消滅

地域の知恵の軽視

この度の災害は原発事故を除いて未曾有ではない

今回の震災は事実よりも理屈を重視する社会の弊害も露呈しました。科学論文では、科学的根拠や普遍性がなければ事実とすることができません。この科学の専門家の認識が、一般社会にも過度に影響を与えています。科学的な理屈を重視するあまり、科学的に説明がつかないとか普遍性がないことを理由に、過去の史実や地域の伝承を軽視し、また消滅させています。また、環境共生社会の実現のために特に重要な、地域の知恵の軽視にもつながっています。歴史をひもとくと、今回のような大津波は過去に幾度となく東北を襲っていたことがわかります。高度な科学的根拠の下に今回のような大津波はないと判断した我が国の原子力発電所の整備は大きな教訓を我々に与えてくれました。この度の災害は原発事故を除いて未曾有ではないのです。

理屈の一人歩き

他人による都合のよい
理屈の利用

理屈をつくる人

理屈を使う人

理屈：条件下、仮定
限界、不確かさ

議論のための理屈

「想定外」という無責任な言葉

さらに状況を深刻化させているのは理屈の一人歩き，すなわち他人が自分に都合のよい理屈だけを利用している事です。理屈をつくる専門家は，その理屈が，ある条件下や仮定の下に成り立っており，それによって得られる結論がある一定の限界を持っていたり，不確かさを持っていることを認識しています。そしてその一方で，専門家は，その理屈が社会的にどのような影響を及ぼすかについては，あまり深い認識を持っていないのが通常です。他方，専門家ではない「理屈を使う人」は，その理屈の限界について深く認識することなく，他との議論に勝つためにその理屈を使います。そしてその仮定からはずれた事象が起きたとき，「想定外」という無責任な言葉を吐くこととなります。専門家依存型社会の弊害がここでも露顕しています。

この度の震災

普通の地域の普通の人々の普通のいとなみが失われた

統計量では濟まない世界

亡くなられた方、被災者、避難移住、ガソリン

普通の地域の普通の人々の普通のいとなみの大切さ、尊さ

この度の震災では、普段マスコミや学界で注目されることがない、普通の地域の普通の人々の普通のいとなみが失われました。そして、そのとき起こった社会現象から、我々は、社会の大多数を占めるこの普通の地域の普通の人々の普通のいとなみの大切さ、尊さを思い知らされると同時に、世間で耳目を集める事象だけで物事を考えてきたことを深く反省させられました。

また、世の中は統計量だけで物事を考えてはいけないことを思い知らされました。今回の震災で1万数千の死者が出たのではなく、一人一人の死が1万数千件あったのであり、その一人一人の死にそれぞれの思いと悲しみがあったことを忘れてはなりません。また、被災地の状況や人々の心は場所によってそれぞれであり、支援や復興は決してそれらをひとくくりにして考えてはいけません。被災者の避難先の確保にしても、全体として数が足りていればよいとの認識が全く通用しなかったこともこのことを表しています。それぞれの地域のそれぞれの生活には、それぞれの事情と思いがあり、その事情と思いはそれぞれの地域の歴史と風土に根ざしています。このような人々のいとなみは、植物と同じように、移植すれば済む話ではないのです。

しかし、このような地域の歴史と風土に根ざした人々の思いを無視した、耳目を集めるようなアイデアや、統計量でしか見ていない復興の議論が各所で行われているのに危惧を抱いているのは私だけでしょうか。

3つのエネルギー (新妻 2010)

自給 エネルギー

生活必需 自然の恵み 自然との共生
生産の喜び 相互扶助 健康 安心
生活の豊かさ 食の豊かさ 一家団楽
多様な関係性

流通 エネルギー

商品 貨幣で置き換えられる価値
売り買い 不特定多数を対象
利便性 価格 カロリー・ワット
事業 採算・効率 流通 競争 優劣

戦略 エネルギー

国家規模 数値 政策 都市側の問題
多様性の喪失、優等生の世界

私はエネルギーには3種類あると思っています。それは「自給エネルギー」「流通エネルギー」「戦略エネルギー」です。「自給エネルギー」は、エネルギー源とエネルギーの利用者が直接つながっているエネルギーで、生活必需のエネルギーを自分のために利用するものです。そこでは、自然との共生をはかりながら持続可能に利用する必要があります、このエネルギー利用は地球の生態系の多様な関係性のうえに成り立っています。また、このエネルギーの利用は、自然の恵みを享受する行為であり、生産の喜びや安全・安心、生活の豊かさ等、貨幣では置き換えられない多様な価値を包含しています。

「流通エネルギー」は、現代社会において我々がごく普通に用いているエネルギーです。「流通エネルギー」は、利用目的を特定せず、不特定多数を対象として商品化され、流通しているものであり、そこではカロリーやワットでエネルギーを表し、全てに共通の価値である利便性や価格、安定度などの質、汎用性などが重要視されることとなります。また、エネルギー供給事業を通して供給されるものであるため、事業の採算性や効率が常に問題となります。「流通エネルギー」の価格は、エネルギーが生活や産業に不可欠なものであるため、オイルショックの例に見られるように、そのときの経済状況、社会状況、国際状況、施策などに大きく左右されます。この度の震災では、この「流通エネルギー」が途絶してしまったわけです。

「戦略エネルギー」は「食糧」と同様に、国家規模でエネルギー問題を考える際のエネルギーの概念です。「エネルギー需給見通し」、「エネルギーの構成比」、「エネルギーの国家戦略」などを考える際に用いられ、数値化された統計量のみで表されます。そこでは、優位性のあるエネルギーの利用が優先され、エネルギーの多様性の喪失が生じます。

身の回りのエネルギー・資源を見直す時

生活のしくみ、社会のしくみを変える

戦略エネルギーや統計量が出発点でない
システム

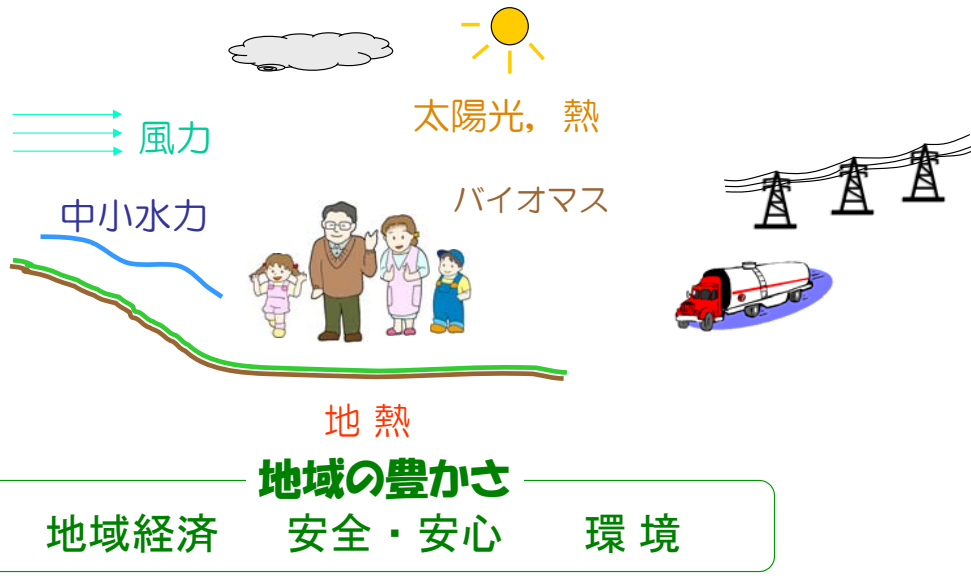
今回の震災では、現代社会における「自給エネルギー」の重要さと、「流通エネルギー」の途絶の深刻さを見せつけられました。この度の教訓を踏まえ、今は身の回りのエネルギーや資源を見直す時であると思います。「戦略エネルギー」や統計量のみが出発点でないエネルギーシステムやエネルギー政策を考え、そして、我々の生活のしくみや社会のしくみそのものを変えるときであると思います。

エネルギー設備が大規模になってくると、開発されるエネルギーはどうしても「自給エネルギー」的性格が薄れ、「流通エネルギー」的性格や「戦略エネルギー」的性格が増してきます。もちろん「流通エネルギー」の開発事業により地域は外部資金が獲得でき、またそれが「戦略エネルギー」として国家に貢献することは喜ばしいことではありますが、それらは外的要因に強く左右され、地域への「自給エネルギー」的恩恵は希薄になってきます。エネルギーシステムが持続可能であるためには、エネルギー設備と地域との多様な関係性を健全化し、それらを活かすことが重要ですが、設備が巨大化してくると、地域との整合がそれだけ困難になってきます。したがって、設備の規模を考える際にも、自給によるエネルギーの安全・安心と地域メリットを確保しつつ、外部社会の状況に即応して、市場経済と自給経済のバランスを柔軟にとることが重要になります。

エネルギーの地産地消

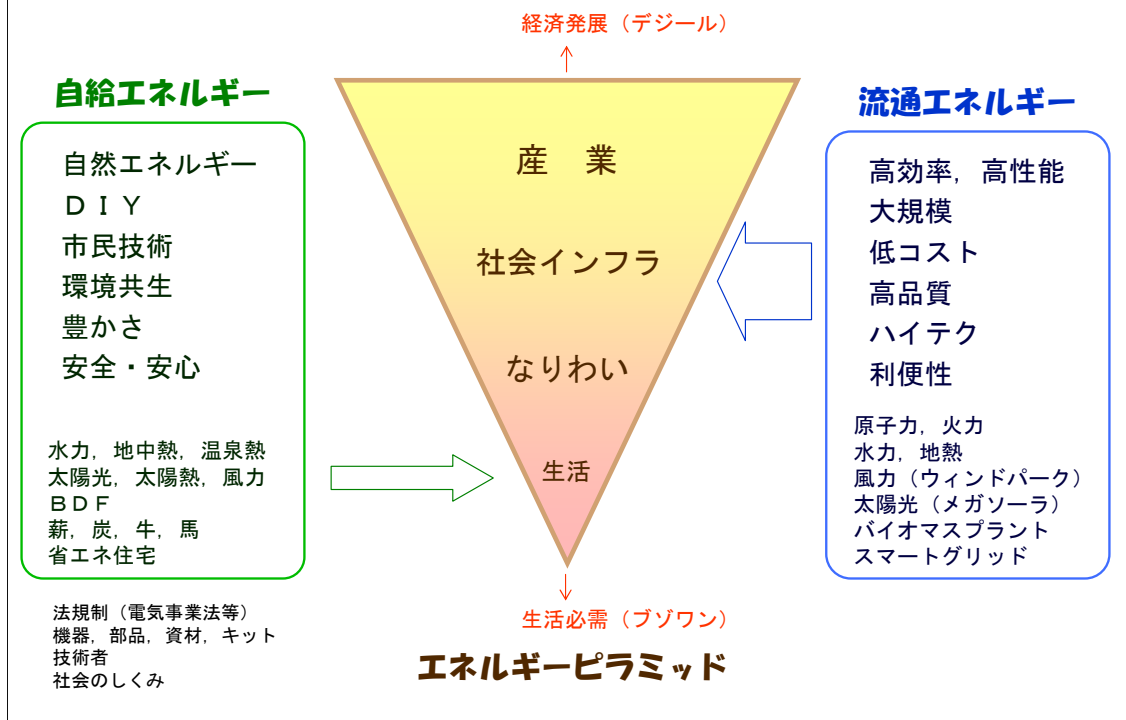
EIMY

Energy in my yard



私はこれまで、地域のエネルギーを地域のために最大限利活用するエネルギーシステム・社会システムである *EIMY (Energy In My Yard)* の概念を提唱してきましたが、この度の震災ではその重要性が図らずも実証されてしまいました。効率を重視しながら、エネルギーを大量に消費する現代文明からの脱却を考えると、*EIMY*の考え方は地域社会において、さらには国家のエネルギー政策を考える上で重要な意味を持つものと考えています。

デュアル・エネルギー・パス (新妻 2011)



我々のエネルギー消費は、我々が生活するのに必要不可欠なエネルギー、社会生活を営むのに必要なエネルギー、交通、商店街等社会インフラに必要なエネルギー、産業に必要なエネルギーと次第に大きくなり、これをエネルギーピラミッドと言います。現代社会ではこれらすべてをまかなうため、高効率・高性能・大規模なエネルギーシステムが、低コストで高品質なエネルギーを供給しています。この度の震災では、この大規模エネルギーシステムのほとんどが機能停止し、地域の産業はもとより、我々の生活も困難なものとなりました。

このような「流通エネルギー」のみに依存する社会のしくみに対して、私が提唱するのは、デュアル・エネルギー・パスという概念です。これは、我々の生活に必要な不可欠な分だけでも「自給エネルギー」で最大限まかなうよう、エネルギーの筋道を二つにしようというものです。「自給エネルギー」は我々の身の回りにある自然エネルギーであり、我々自身あるいは地域の人々によってその利用システムが維持管理できるものです。

生活に必要な不可欠なエネルギーは、今回の震災の経験からみても、それほど大きなものではありません。また、家電等が工夫されれば、産業界で求められているような高品質なものである必要もありません。

現代社会は「流通エネルギー」ですべてのエネルギーをまかなうようにできていますので、デュアル・エネルギー・パスを実現しようとすると、様々な法規制や機器、部品の調達等の問題が出てきます。また、「自給エネルギー」を利活用するための地域の技術者の養成も必要になるでしょう。

デュアル・エネルギー・パスの概念は、一つのシステムに対しても拡張することができます。すなわち、そのシステムへの外部からのエネルギー供給が止まったとき、どうしてもエネルギーが必要なところには、身の回りのエネルギーを利用できるようにしておくことがそれにあたります。

Map Lover と Map Hater

(福岡 2009)

花は無心にして蝶を招き、蝶は無心にして花を訪ぬ
知らず 天帝の則に従う

**いのちをいただき、
いのちをいかす。**

福岡伸一氏は、「マップラバー（地図を愛する人）」と「マップヘイター（地図を憎む人）」の例えを用いて生命現象を説明しています。生物を構成する個々の細胞は、臓器や生物の機能を意識して活動する「マップラバー」ではなく、その細胞をとりまく環境に対して、単純で身近な原理に基づき反応しているにすぎない「マップヘイター」であると福岡氏は述べています。人間社会についても同じことが言えます。例えば市場原理主義の社会では、人々は当初は市場経済やグローバリズムの特徴、利点、問題点などに注意を払う「マップラバー」であっても、いざそのシステムが走りだすと、そこまで戻って考える人はいなくなり、競争原理や利潤追求などの単純で局所的な原理に基づき行動する「マップヘイター」になっていきます。獲得したものは自分の能力や努力によるものであり、それをどう使おうと勝手であるとばかり、資金の獲得に奔走し、たといその資金の出所が国民の税金であったとしても、そのいのちをせいっぱいいかす努力はそこそこに、さらなる資金獲得に走るという構図に陥っていきます。組織にあっても、その組織の目標に沿った生産の効率を重視するあまり、組織の人材の個々のいのちをおろそかにし、人それぞれのいのちを精一杯いかすのではなく、組織のその時の目標達成に適した人材を他に求めることに腐心することになります。このような社会が資源やエネルギーの浪費を生み、人々の心を疲弊させるとともに、環境問題をより深刻なものにしています。

環境共生型文明社会では、この個人レベルの単純な行動原理が、個人の行動を規定するうえでも、それらの総体としての社会システムを考えるうえでも極めて重要です。良寛さんは、この原理を「花は無心にして蝶を招き、蝶は無心にして花を訪ぬ。知らず、天帝の則に従う」という美しい詩で表現しています。私の言葉ではこの単純な原理は「いのちをいただき、いのちをいかす」ことであると思います。野性生物が環境共生を意識しなくとも、自らのいとなみが環境と共生しているように、「いのちをいただき、いのちをいかす」という心が根底にありさえすれば、ひとりでの環境共生のライフスタイルになり環境共生社会になるような社会が本来のありかたなのではないでしょうか。

東ニ病氣ノ子供アレバ
 行ツテ看病シテヤリ
 西ニ疲レタ母アレバ
 行ツテソノ稲ノ束ヲ負ヒ
 南ニ死ニソウナ人アレバ
 行ツテコハガラナクテモイ、トイヒ
 北ニケンクワヤソシヨウガアレバ
 ツマラナイカラヤメロトイヒ
 ヒデリノトキハ ナミダヲナガシ
 サムサノナツハ オロオロアルキ
 ミンナニデクノボートヨバレ
 ホメラレモセズ
 クニモサレズ
 サウイフモノニ
 ワタシハナリタイ

私の父は判事でした。父の仕事場である部屋の床の間には、この宮澤賢治の詩、アメニモマケズの後半部分が書かれた掛け軸がいつも下がっていました。父が任官して間もなく、字の上手な書記官に書いてもらったものだそうです。

私が専門家と言われるような人間になり、EIMYの研究を通していろいろな地域に出入りし、自分の専門を超えた地域社会のことを考えるようになったこの歳になって、やっと、父がなぜあの詩のあの部分を生涯にわたり書斎にかけていたかが分かりました。

もし、現代のなまはんなかな専門家がこのような場面に接したら、さしずめ次のようになるでしょう。

東に病気の子供あれば	病院に行って診てもらえと言い
西に疲れた母あれば	企業を誘致してそこに勤めれば、1日中座って仕事をしてられると言い
南に死にそうな人あれば	都会では高度医療が発達していると言い
北に喧嘩や訴訟があれば	有力者を紹介してやろうと言い
日照りのときは	地球温暖化だと言い
寒さの夏は	エルニーニョだと言う

雨ニモマケズ
 風ニモマケズ
 雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ
 丈夫ナカラダヲモチ
 慾ハナク
 決シテ瞋ラズ
 イツモシヅカニワラツテイル
 一日ニ玄米四合ト
 味噌ト少シノ野菜ヲタベ
 アラユルコトヲ
 ジブンヲカンジョウニ入レズニ
 ヨクミキキシワカリ
 ソシテワスレズ
 野原ノ松ノ林ノ蔭ノ
 小サナ萱ブキ小屋ニイテ

ここまで考えたとき、この詩の前半に

アラユルコトヲ
 ジブンヲカンジョウニ入レズニ
 ヨクミキキシワカリ
 ソシテワスレズ

とあるのに気付きました。専門家というものは、あらゆることを自分の専門に照らして見聞きし、理解する性癖をもっています。すべてをお金に置き換えてものを考えると、お金では置き換えることのできない大事な価値を見落とすように、自分の専門を通してものを理解すると、人々の本当の思いや願いを知ることができません。子供や母がそのときに何をしてもらいたいのか、どのような思いか、自分を勘定に入れずに、人間としてよく見聞きしわかり、その上で、そのことを忘れずに、自分の専門に照らして自分のできることを考えるのでなければならない、と法律家である父は自分を戒め、それを一生の座右の銘としていたに違いありません。

環境問題を始め、現代社会の問題の多くは、専門家と言われる人々によって引き起こされ、それらが専門分化されて、ますます生活者、一生命体としての人間から乖離していくことにより深刻化していると言っても過言ではありません。今回の震災で露呈した様々な問題はこのことと深く関係していると思います。

東北人は劣るから震災がおきたのか

支援相手の蔑視

支援と優越感

益々高度化、益々専門分化なのか

支援という名の支配

東北学の重要さ

その土地の風土はその土地の人が一番良く
知っている

忘れさせたのは誰か

縄文以来の知恵、歴史、伝統、文化

地域コミュニティ、環境共生社会

東北人の底力

この度の震災は、東北人が劣るからおきたのでしょうか。当然そんなことはありません。しかし、今の復興、支援の大合唱の中には、支援相手の蔑視や弱者相手の優越感が垣間見えるものもあると思うのは私だけでしょうか。「観世音菩薩は娑婆世界に遊ぶ」と言われます。観音様は苦悩うずまく現実の社会に身を置いて人々を救済するという意味です。行政や専門家にあっては、今こそ「上から目線」ではなく、「地域目線」で物事を考えるべきであると思います。

現代社会では「支援」という名の「支配」が各所に横行しています。そしてそれらの主体がそのまま被災地支援を行いつつあるようにも思えます。そしてここでは、人々から乖離した益々高度化・巨大化したシステム、益々専門分化した技術によってつくられたシステムが、地域の人々の思いとは無関係に構築される恐れもあります。東北を、このような単なる公共事業のかたまりにしてはならないと思います。

おのおのの地域にあって、その土地の風土はその土地の人々が一番良く知っています。そしてそれはその地域の縄文以来の知恵、歴史、伝統、文化に基づいています。また、これからの持続可能な環境共生社会をつくりあげるために不可欠な地域コミュニティが東北では現在にあって息づいています。

外部からの支援や専門家の知恵は、あくまでも、それら地域の人々の力を下支えるものでなければなりません。



ファシズムへの道か 戦後の復興か

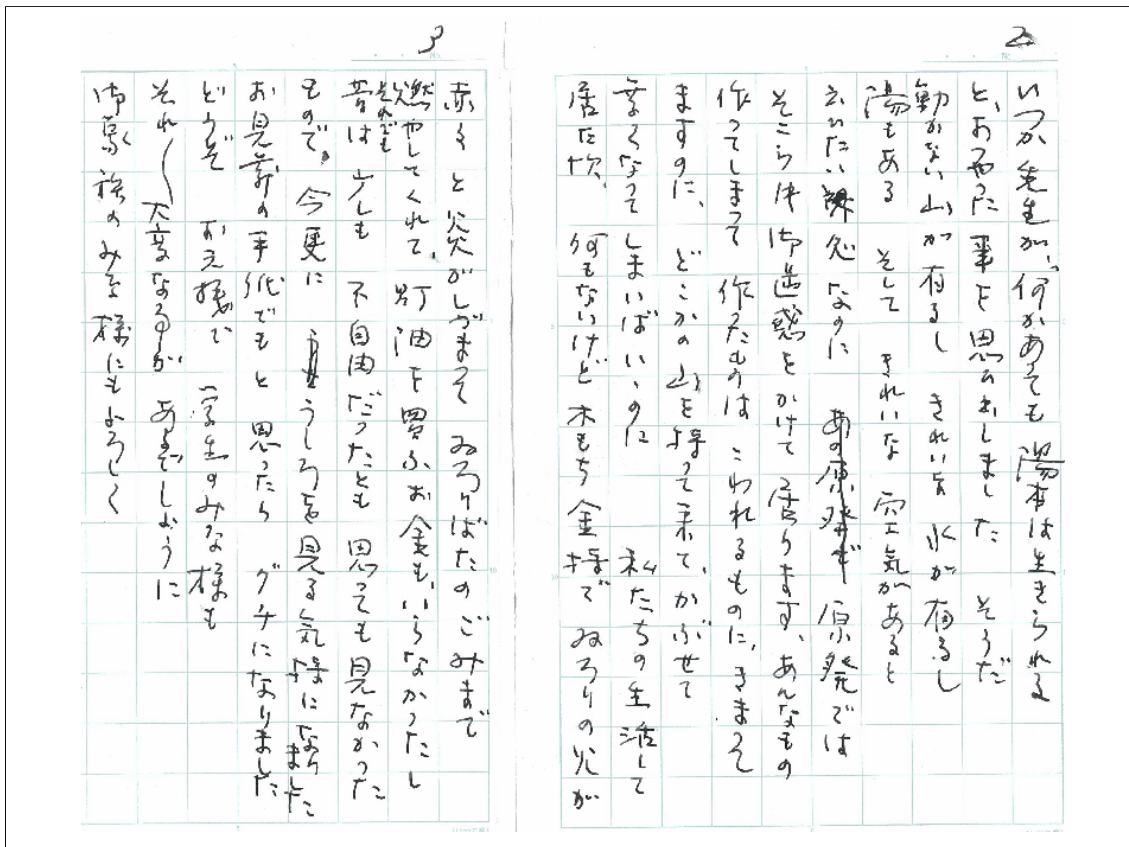
死んだ人のためにも、やるしかありません。
やれば今より必ず良くなります。

自然は時には過酷です。
しかしその反面やさしさもあります。

災難にあうときは災難にあうがよろしく候
死ぬときは死ぬがよろしく候

今、東北の被災地では東北人による粘り強い復興が始まっています。人々は、「死んだ人のためにも、やるしかありません。やれば今より必ず良くなります」「自然は時には苛酷です。しかしその反面やさしさもあります」と言っています。自然とともに生きてきた人々のところです。また、三条大地震で被災した良寛さんが述べた「災難にあうときは災難にあうがよろしく候 死ぬときは死ぬがよろしく候」の覚悟で、その地で必死に耐えています。

敗戦で何もかも失った我が国には自然豊かな国土と地域コミュニティがありました。そこでは、人々が復興に向けてそれぞれの地で耐え忍びました。今から思えば、昭和30年代の人々の明るさと希望は、このような気持ちから出たのではないのでしょうか。それに対して、関東大震災の後我が国は、経済恐慌を経て、ファシズムへの道を歩みました。復興への向けての現在の社会の動きにファシズムの影を感じるのは私だけでしょうか。



私が EIMY の実践研究を行っている福島県天栄村湯本の 90 になるおばあちゃんから震災の後、お見舞いの手紙が届きました。それには「いつか先生が、なにかあっても湯本は生きられるとおっしゃった事を思い出しました。そうだ動かない山があるし、きれいな水があるし、湯もある。そしてきれいな空気があると云いたい処なのに、原発ではそこら中御迷惑をかけて居ります。あんなもの作ってしまつて、作ったものはこわれるにきまつてますのに。どこかの山を持って来てかぶせて亡くなってしまえばいいのに。私たちの生活して居た頃、何もなけれど、きもち金持ちで、いろりの火が赤々と炎がしづまつて、いろりばたのごみまで燃やしてくれて、灯油を買うお金もいらなかったし、それでも昔は少しも不自由だったと思つても見なかつたもので、今更にうしろを見る気持ちになりました。・・・」と書かれていました。

このおばあちゃんの「あんなもの作ってしまつて、作ったものはこわれるにきまつてますのに」という言葉に、現代人の誰が反論することができるのでしょうか。

提 言

- ・ この度の震災は、エネルギー多消費型の文明から環境共生文明への転換の契機とすべき
- ・ 高度な巨大システムの相互依存からの脱却が必要
- ・ *EIMY*, デュアル・エネルギー・パスの概念を取り入れたエネルギー政策
- ・ エネルギー源から利用までの総合的な視点と取組み
- ・ 市民が支える農林水産業のしくみの構築
- ・ 我が国における東北の役割と意義, 問題点の再認識
- ・ 地域を下支えする行政, 専門家